

教科横断型授業による効果

田園調布学園中部・高等部 入 英樹

実践背景

■課題

- (1). 生徒:授業をただ聞いているだけで、現象のつながりや様々な疑問、また、問いを見出そうとしていないのではないか。
- (2). 教員:教科横断型授業の目的や効果を検証できていないのではないか。

■仮説・得たい成果(生徒)

- (1). 授業中や日常の様々な場面で「つながり」を見出すようになる。
- (2). 授業中や日常の様々な場面で「なぜ?」と考えるようになる。
- (3). 学習への取り組みや行動が変化する。
- (4). 結果として数値で見られる学力も向上する。

実践方法

- 対象学年: 高等部3年生
- 対象生徒: 物理選択者全員(49名)
- 実践期間: 2024年5月~12月
- 実践の内容

- (1). 月に1回程度、お互いの教科にとって有益な教科横断型授業を実施する。
- (2). 教科横断型授業の実践後や学期ごとに授業アンケートを取る。
- (3). 定期考査や学力テストの結果を見る。

取得データおよび検証方法

■取得データ・検証方法

- (1). 教科横断型授業の実践後や学期ごとの授業アンケートから変化をみる。
- (2). 定期考査や学力テストの結果を検証する。

■教科横断型授業の紹介 (2024年4月~)

【フェルマー点 数学×地理×物理】

フェルマー点について、力のつり合いや等角中心、3頂点からの距離の和が最小など多面的に考える。



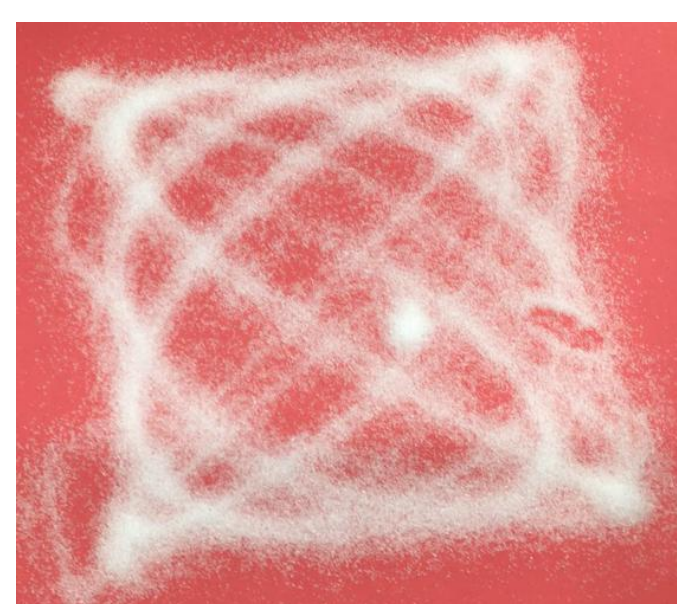
【KAPLAブロックによる重心と無限級数 数学×物理】

ブロックを崩すことなく、どこまでずらせるかの検証。



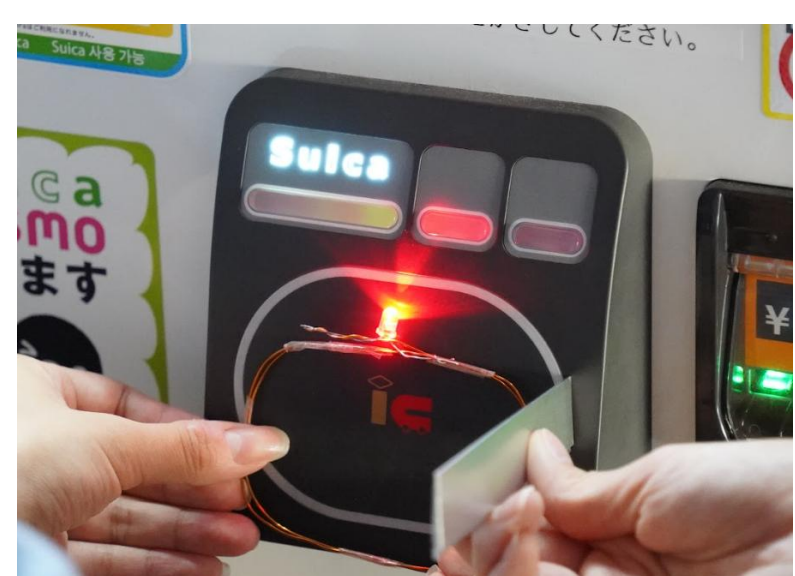
【単振動におけるリサーチ曲線 数学×物理】

振り子の振動について、2次元に拡張して描かれる軌跡をグラニュー糖で描く実験。



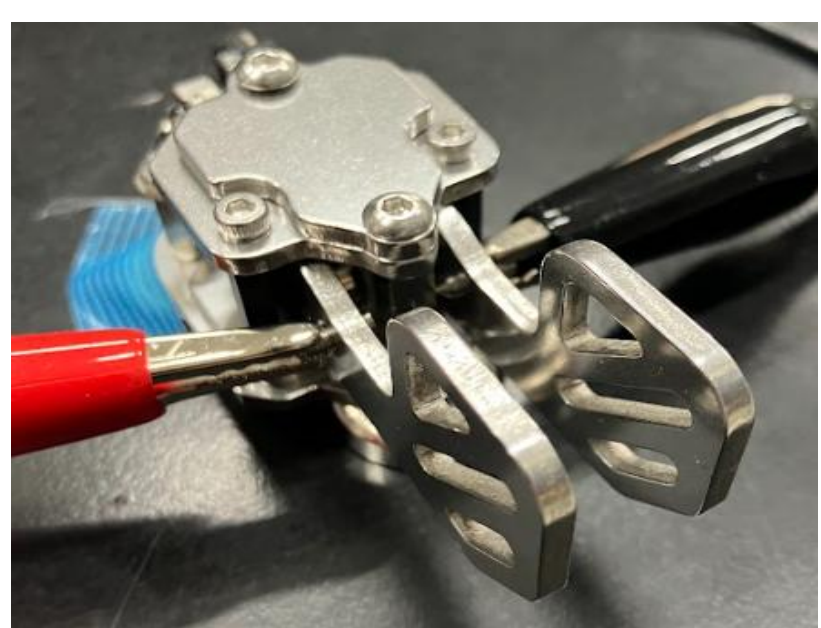
【電磁誘導~情報システムの在り方を考える~ 情報×物理】

日常生活の中で利用している情報技術には、日頃から学習している原理が多く応用されていることを、電磁誘導を題材に学ぶ授業。



【モールス符号 情報×物理】

モールス符号をはじめとする通信の歴史を知り、実際に回路を制作してモールス符号を打鍵する。モールス符号の利点や課題点、電磁波の仕組みを体感する。



結果

■クラス内アンケート結果平均 4月→7月→12月

(1: 思わない、2: あまり思わない、3: 少し思う、4: 思う)

- (1). 物理の授業中、内容について横断的に考えるようになった。
2.5→3.2→3.3 +0.8
- (2). 物理以外の授業中、内容について横断的に考えるようになった。
2.5→3.0→3.0 +0.5
- (3). 【学習動機】
今勉強していることが他の教科に役立つと思っている。
2.9→2.8→3.4 +0.5
- (4). 【学習方略】
これまでに学んだこととどうつながっているかを考えながら勉強している。
2.7→3.3→3.5 +0.8

■生徒個別分析

- 高2 2月共通テスト進研模試(偏差値)
- 高3 9月ベネッセ・駿台共通テスト模試(偏差値)
- 高3 1月大学入学共通テスト(得点) ※全国平均62.97点

(1). 生徒A

- ・50.5→61.1→90点
- ・授業アンケート

苦手意識を持っている中での高3スタートでしたが、横断型授業の中で、世の中とつながる実際の現象を見る場面が多く、**物理と日常とのつながりを意識する**ようになりました。

(2). 生徒B

- ・51.4→61.1→83点
- ・授業アンケート

電磁誘導の横断型授業で、以前から疑問に感じていた改札機のパスモの仕組みが理解できて嬉しく、**毎日改札機を見るたびに理論を思い出しています。**

(3). 生徒C

- ・42.6→53.4→61点
- ・授業アンケート

学習した物理現象を使って、モルス信号の回路などを実際に作ることができて、物理現象と実生活の関係がよく分かった。**日常からつながりを考えて学習しています。**

(4). 生徒D

- ・38.3→46.3→51点
- ・授業アンケート

高3の4月の時点では、物理の原理も解き方も面白さも何も分かっていなかったけど、横断型授業や演示実験を通して、**日常生活とのつながりを感じ、物理って面白いと思えるようになり、もっと頑張ろうというモチベーション**になりました。

考察と今後の課題

- (1). お互いの教科にとって有益な教科横断型授業は、一回実施するだけでも生徒の印象に残り、様々な場面で「つながり」を見出すようになる。ただ、疑問や問いを見出しているかまでは検証できなかった。
- (2). 学力の下位層について、日常とのつながりを意識できるような教科横断型授業を受けることで、普段の学習への取り組みに良い効果がある。
- (3). 学術的な内容の教科横断型授業については印象が薄くなり、教科横断型授業が多方面への良い影響を与えるとは言えず、今後の検討課題である。
(フェルマー点、KAPLAブロック、リサーチ曲線など)

希望者による哲学対話を通じて、 生徒の学習観やメタ認知能力の変容を検証する

田園調布学園中部・高等部 坂本 登

実践背景

【問題意識】

・「テストに出るから」「受験でつかうから」といったごくごく短期的で即物的な目的・目標で学んでいる生徒が多く、もっと長期的で抽象度の高い目的・目標—学ぶことそのものの価値や人生の意味など—を考える場が少ない。

・自分で問いを立てたり考えたりするなど、時間をかけて課題に向き合う場が少なく、すぐに答え(模範解答)を求めてしまう。

【ねらい】

・正解のない「哲学対話」を通じて、生徒自身が問いを立てたり、それについて授業を超えた取り組みのなかで考えたりすることの意義を体験することで、定期考査などの成績を超えた内発的動機づけの獲得を図る。

【目指す姿】

・生徒たち自身が、普段の生活の中で、自分自身を見つめられるような習慣が付き、学習に対しても自分で動機付けることができる。

実践方法

◆対象学年: 中2・高3の希望者

◆実践期間: 1学期・3学期のそれぞれ1回ずつ

◆実践内容: 希望者向けの哲学対話(主に放課後を活用)

【哲学対話の概要(使用スライドは別資料参照)】

◆進行役(ファシリテーター): 坂本(実践者)

◆テーマの設定: 基本的には進行役の坂本が設定

◆哲学対話のルールについて(抜粋)

- ①何を話してもいい。
- ②話さなくてもいい(ほかの参加者の話を聞くだけでも良い)。
- ③話した人に否定的な態度をとらない。
- ④結論を出そうとしなくてよい。
- ⑤途中で主張が変わってもよい。
- ⑥知識ではなく、経験に基づいて話すこと。

◆場所: 本校舎の空き教室

第1回: 探究教室

第2回: 第二校舎 なでしこホール

◆工夫したこと・苦労したこと

- ①第1回の複数学年が参加した回は、呼んでほしい名前をシールに書いて貼らせた(実践者も同様)。
- ②発言者が重ならないようにコミュニケーションボールを使って、話す人を明らかにした。
- ③実施場所については、対話に集中できるように普段あまり使わない(ほかの生徒が立ち入らない)場所を選んだ。
- ④ファシリテーターとして工夫したこと
 - 1)できるだけ多くの方が発言できるように、まんべんなく発言を促した。
 - 2)意見が偏ったり、停滞したときは拡散させたり、少しずつしたりした。
例)「今、〇〇についてたくさん意見が出ているけど、他の視点や、考えたことはある?」「自分が当事者だったら、どのように考える?」
 - 3)適宜発言を整理したり、言い換えたりすることで、言葉の誤解やブレのないように心がけた。
例)「〇〇な状態って例えば〇〇ってこと?」「言い換えるとこんな感じ?」

取得データおよび検証方法

<取得データ>

それぞれの回の生徒の発言・対話後の振り返りコメント

第1回(6/27(木) 中2:2名 高3:6名)

テーマ:「予防的正義はアリか」

第2回(2/07(金) 高3:8名)

テーマ:「日本は未成年のSNSを規制すべきか」

<検証方法>

高等部生徒の発言・振り返り

結果

<データより(一部)>

①生徒の発言

第1回(6/27(木) 中2:2名 高3:6名)

中2:「人びとの規制が強くなるのはよくない」

「取り返しがつかないことになるので、賛成」

高3:「頭の中のこと(思っただけのこと)を規制されるのは、思想の自由に反する」

「起こったこと以外のことに責任を負うのは納得できない」

第2回(2/07(金) 高3:8名)

高3:「誹謗・中傷の温床になっている(から賛成)」

→子どもだけの問題か?

→SNS発達以前からいじめなどはあるのでは?

「新しい技術や知識を得る手段でもあるので、反対」

→その信ぴょう性については? 有名人の言葉は正しい?

②振り返りコメント(第1回 一部)

中2:「今回のテーマで最初は反対だったのですが、賛成や中立の意見を聞いて更に考えさせられ、自分の考えが深まっていくのが実感でき、わくわくしました。」

高3:「予防的正義が行き過ぎてしまった場合においては、そもそも「なぜ犯罪を犯してはならないのか」という根本の倫理観の崩壊に繋がりがかねないと感じた。予防的正義によって拘束されたくないから、社会的な地位を失いたくないからという理由で犯罪を抑止するというのは、犯罪の根本的な解決にはならず、将来的には逆に犯罪件数が増えちゃうのではないかと思った。」

⇒高校生は

1)学んだことを踏まえて自分の言葉で語る?

2)他者の話したことを参考にしながら、自分の言葉で語っている?

3)具体的なことから抽象的なことへ類推している?

考察と今後の課題

◆このような取り組みを面白いと思える生徒は総じて、「考えることや他者の意見を聞くことが楽しい」、「答えのない問いに向き合うことが好き」であることを再確認した。

◆第1回のように異学年の意見を聴くことで、「自分の言いたかったことが言葉化された」といった声もあり、結果として学び合いになった。

◆高3にもなると、授業等で学んだことを活かしながら自分の言葉で語るができるようになってきている場面も多くみられた。また、他の参加者の意見を参考にしながら、自分の意見に取り入れたり、反駁したりするなど、対話の活性化に貢献していた。

◆今回の対話で大切にしたルール⑥の「本に書いてあった」などの知識ではなく、自分の経験を語ることで、(予定調和の答えではない)自分にとっての意味や主張を話すことを促した。

⇒自分にとっての学ぶ意味などを考えるきっかけになるとよい。

◆高学年ほど、語彙はもちろん普段の授業や自分の経験から徐々に抽象度を上げて(自分のこと→社会のことなど)語るができるという実感を得た。今後は生徒がファシリテートしたり、教員なしでもこうしたことが自発的に行われるような場づくりについて考えたい。

主体的言語化能力の育成—思考力を問う作問を通して

田園調布学園中等部・高等部 橋本 彬生

実践背景

【実践者の課題意識】

■従来の国語(現代文・古典)の授業において、生徒の学習が定期考査で点数をとるための表面的な文章の読解に留まっている。単なる知識問題であれば「覚えれば解ける」が、近年の大学入試で出題されるようないわゆる「思考力を問う設問」に弱みがある。複数テキストの内容を結び付ける同一文章内を様々な視点から分析したりする経験が少ない。

■生徒の発想の例...ネガティブな学習観「結果志向・暗記志向」
例①)現代文では...ワークシートや教科書の設問の解答をなんとなく記憶していれば部分点はとれる。
例②)古文・漢文では...定期考査範囲の文章の品詞分解や現代語訳を丸暗記すると点数がとれる(=模試など**初見の文章には対応できない**)。

具体的な実践内容・実践方法

- 対象学年:高等部2年「論理国語」および「古典探究」
- クラス数および対象生徒人数:1クラス・39名
- クラスの特徴:文系・学年上位
- 実践期間:2024年度(1年間)、1~2学期
※昨年度から継続して実践の対象となっている生徒は20名。
- 実施した単元:
 - I.論理国語:1学期:「動物の信号と人間の言語」(評論文)
 - II.古典探究:1学期:「推敲」(漢文)
 - III.古典探究:2学期:「背水之陣」(漢文)

■進め方:各単元とも、
①本文の内容確認(教員主導) → ①個人での作問活動
→ ②グループでの作問活動 → ③クラス全体での共有
という流れを原則とした。以下に単元ごとの活動の特色を示す。

【I.論理国語(評論文)...「ジグソー作問」】

- ①個人での作問時、設問は「内容一致型の選択肢問題」と形式を指定し、作問範囲を本文の**特定の意味段落に限定**。
- ②5~6人のグループで設問・模範解答を吟味し、整える。
 - ▶作問範囲が異なる生徒同士でグループを作り、**個人で作成した選択肢をグループに持ち寄ることで本文全体の内容を問える**選択肢問題ができる。
 - ▶模範解答・解説を作成。解答根拠を明示。
- ③他グループが作成した設問を解く。
 - ▶自分たちで選択肢や解説を作成するに加え、様々な選択肢を読んでその内容を吟味することで、本文全体の内容理解が深まる。

【II.古典探究(漢文「推敲」)...「予想問題作成」】

- ①個人での作問時には、「知識問題と思考力を問う問題を最低1題ずつ含めること」と指定。
- ②グループで議論し、そのグループで**「ベストな1題」**を作成する。
 - ▶設問の形式に制約は設けない。ただし、「他のグループでは考えつかないような(内容がかぶらないような)ものがよい」と指示。これにより(単に一つの知識のみで解ける)単純な問題は出づらくなる。
- ③教員がクラス全体でそれぞれのグループが作成した問題を集約、設問の順序や体裁を整える。
 - ▶いわゆる定期考査の「大問一つぶん」に相当する問題が完成。他クラスの生徒も見られるようにして、学年全体で同単元の理解を深めた。

【III.古典探究(漢文「背水之陣」)...「思考力を問う会話文問題作成」】

- ②グループでの作問時には、「単なる知識だけでは解けない・**会話文形式の問題**」と形式を指定。
 - ▶工夫したポイント、「問うている力」を明示させる。
 - ▶結果として関連資料を自ら調べ、引用して複数テキストの作問を行った班もあり。
- ③クラス全体で各グループの設問を解く。
 - ▶それぞれのグループにこだわった点、また他グループの設問の良かった点などを言語化させる。

具体的な実践内容とねらい

【実践者の仮説・ねらい】

- ①文章理解の質を高め、思考力を問う設問への対応力を磨くために、「**問題を解くためにどのような力が求められているか***」を解く側である生徒自身が理解する必要がある。作問者側の視点に立つ(=「何を」「どう問うのか」を自身で設定してみる)ことでそれを学習できる。
- ②上記「*」を活動の中で言語化し、他者と協働することで学習観(「実践背景」の生徒の発想例にあるような)が転換していく。

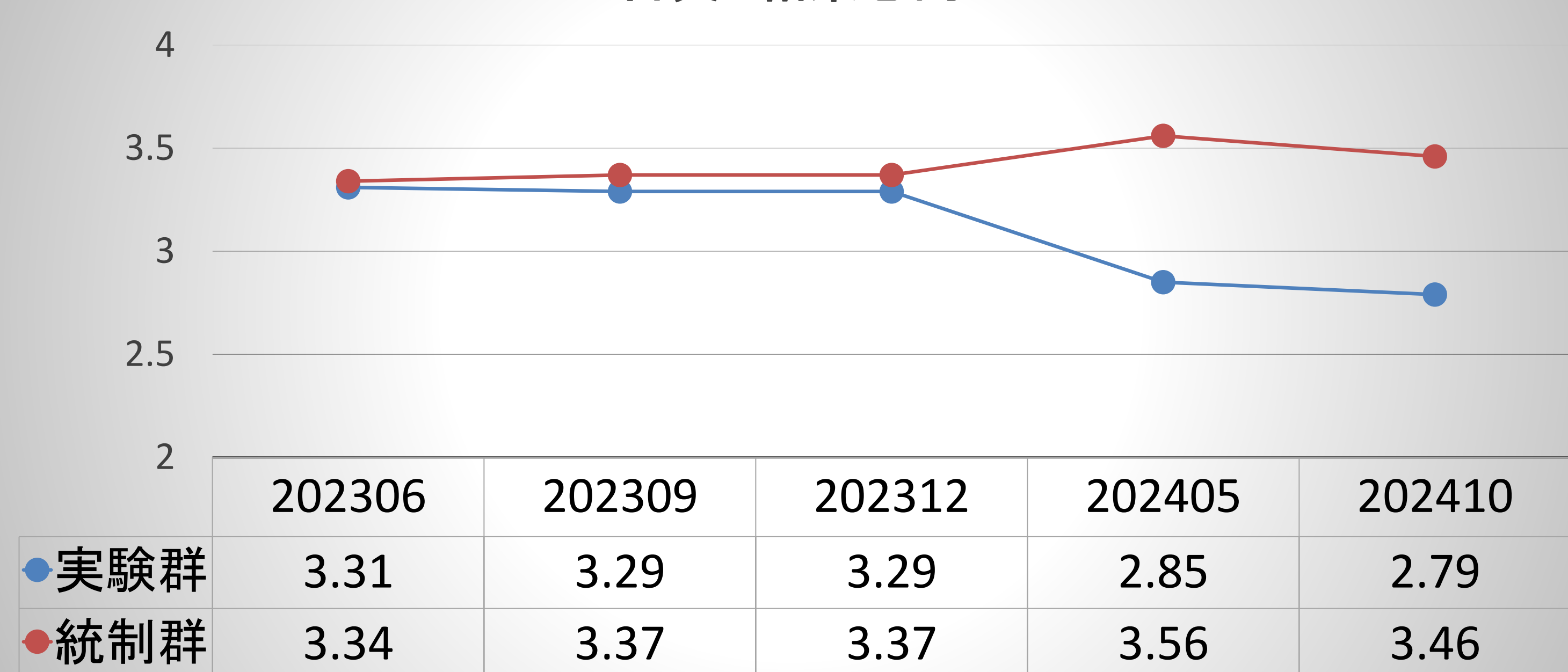
取得データおよび検証方法

- ①国語の学習に対する意識の変化【アンケート調査】
実践の有無による成績の変化【定期考査、模試の成績比較】
- ②授業中の発言、作問の質などの変化
なお、昨年度も同様の実践を高等部1年「言語文化」の授業で実施している。同実践を2年連続で受講したグループ(実験群N=16)と、2年連続で受講していないグループ(統制群N=36)を比較した結果を抜粋して以下に示す。

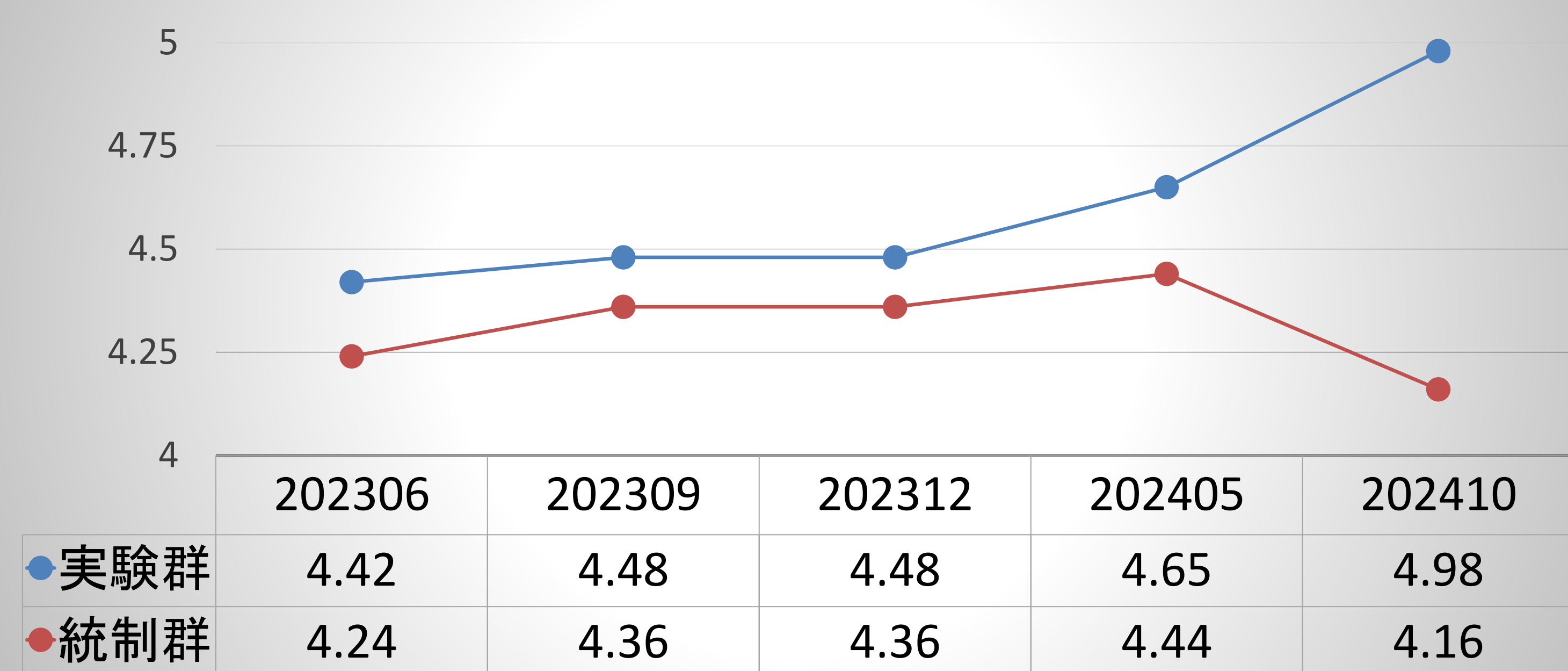
結果...実験群と統制群の比較から

- ①ポジティブな変化が見られたもの(有意差・優位傾向):
 - ・古典「プランニング」、「結果志向」、「意味理解志向」、「暗記志向」
 - ・現代文「結果志向」、「暗記志向」
- ②現代文分野では大きな学習観の変容とまでは至っていない。

古典 結果志向



古典 意味理解志向



成果と今後の課題

- 現代文・古典ともに「**結果志向**」に**ポジティブな変化**が生まれている。作問活動を通じて、「その試験で良い点数がとれさえすればよい」という意識が減り、設問がどのような視点でつくられ、それゆえにどのような知識や考え方が必要なのかに意識が向いてきたのだと考えられる。
- また、「暗記志向」と古典の「意味理解志向」の変化からは、「知識を単にインプットするだけでなく、それぞれの事項の意味内容を理解し、知識の連関を捉えることが肝要である」という意識が芽生えてきたといえるか。
- 授業内での実践・活動の回数は限られてしまう中で、今後は生徒の自学に対するアプローチをどのようにできるかを意識して実践の内容を考えていきたい(特に現代文分野での実践について)。

反転授業を用いた英文法学習の定着

田園調布学園中部・高等部 長谷井 翔太

実践背景

従来の英文法授業は、教員の解説をノートに写す受動的な学習が中心であり、生徒の理解が浅く、応用力が身につけにくいという課題があった。

特に、授業内での演習機会が不足しているため、知識を実践的に活用する力が養われにくい点が問題だった。

この背景には、①生徒が「自ら学ぶ習慣を身につけていない」ため、授業で教わったことを十分に定着させられない、②近年の共通テストや大学入試では、単独の文法問題が減少し、文法を読解の中で活用する力が求められる、という二つの要因がある。従来の授業スタイルでは、この変化に対応する学習プロセスを確保できないことが課題だった。そこで、事前学習で文法の基礎を学ばせ、授業内では演習や個別指導に重点を置く「反転授業」を導入。

これにより、授業時間をアウトプットに充てることで、生徒が知識を実践的に活用できる機会を増やし、主体的な学びを促すことを目指した。

実践方法

■対象学年: 中部3年生

■クラス数および対象生徒人数: αクラス、約40名(最上位クラス)

■クラスの特徴: 到達度別授業の最上位クラス

■実践期間: 1年間

■実践内容:

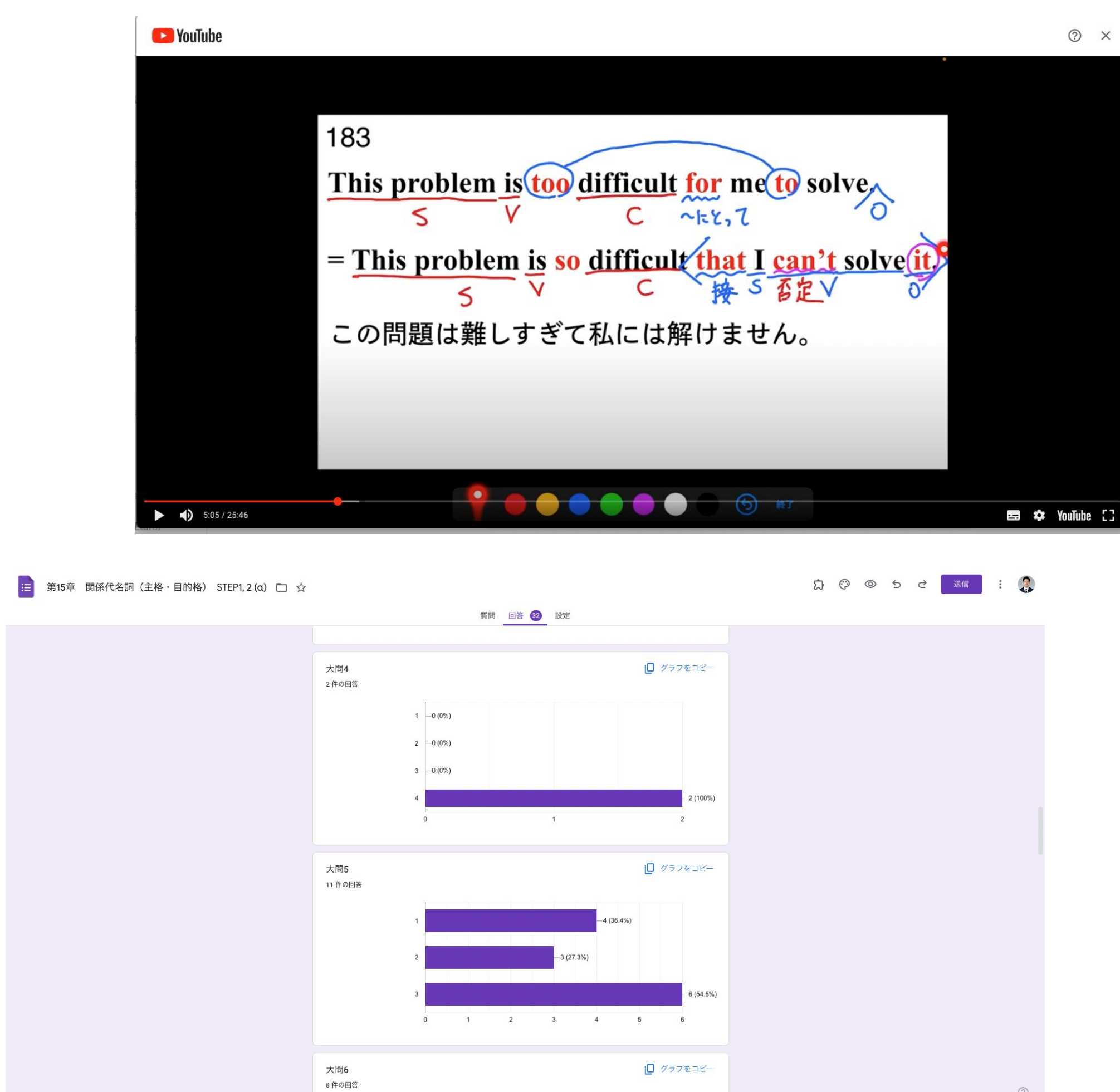
①解説動画を用いた事前学習

・新中学問題集 発展編の新しい章に対応した解説動画を作成し、授業前に配信。生徒は動画を視聴し、事前に演習を行った上で授業に臨むことを前提とする。

・授業内では、従来のような解説を省略し、生徒が理解できなかった箇所をGoogleフォームで集計し、多かったものと発展的な問題に絞って指導をした。

②Weblio Studyの活用

英文法の知識を活用する力を養うために、オンライン学習のWeblio Studyを導入し、生徒がスピーキングやライティングの学習を自主的に進められる環境を整備。



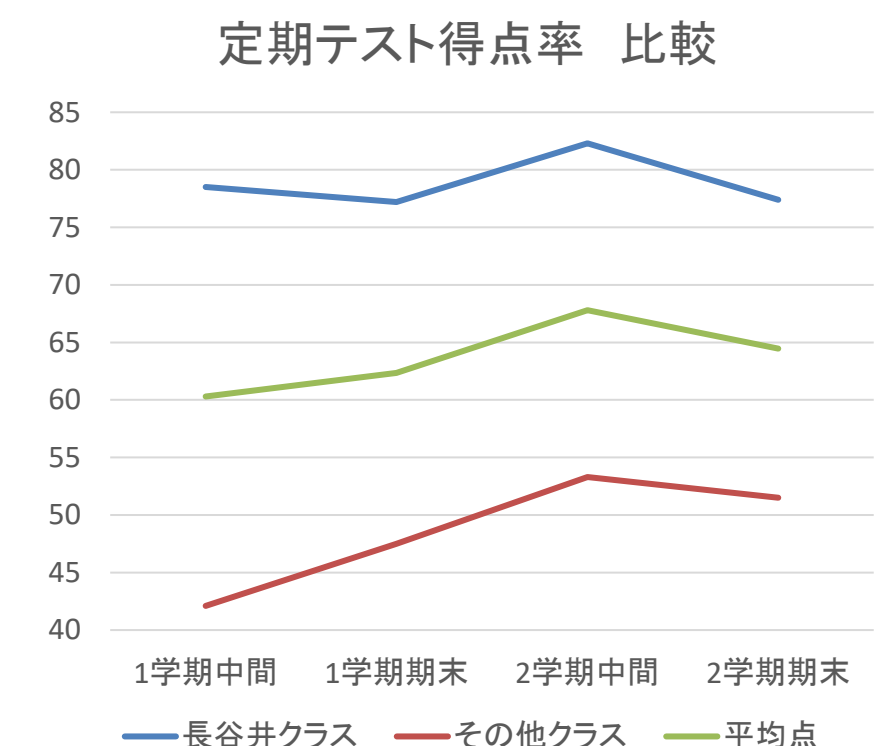
取得データおよび検証方法

- ・学力テスト(年3回)における文法項目の点数上昇。
- ・Sゾーン、A1ゾーンの人数の上昇。
- ・授業アンケートによる分析。

結果

【定期考査】

Aクラスに1年間定着した人数(定員:約40名)	
2022	24
2023	23
2024	26



↑他クラスと比べても大きな変化は見られなかった。

【アンケートより生徒の感想】

・わかりやすく文法の要点がまとまっておりいいと思う。また、授業の前に動画を視聴することでより理解が深まり、テスト前に復習するとわかりやすいためいいと思う。

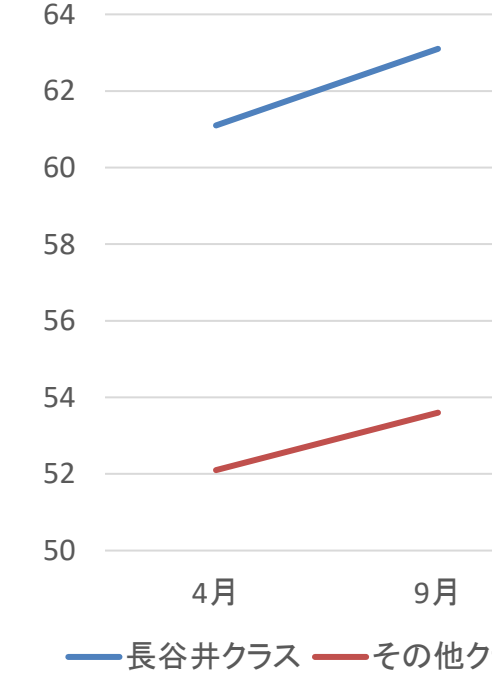
・内容が難しくなると自分で解くのも大変だったけれど、説明を読んだり動画を見たりして理解できた。

・授業前に動画を見て問題を解いておくことで授業がスムーズに進むところも良いと思いました。

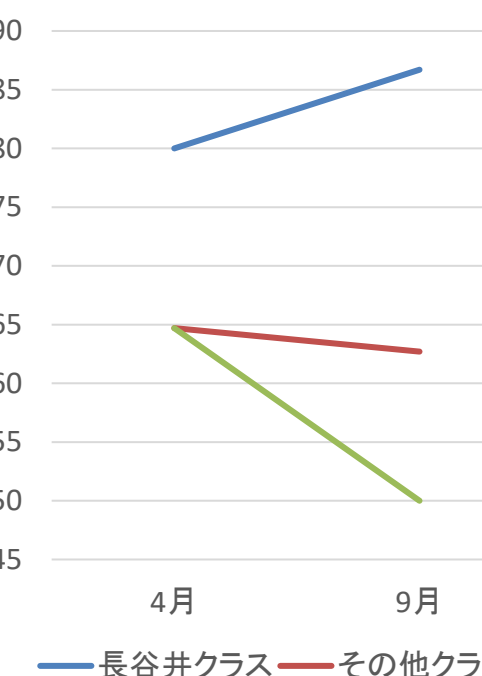
【学力テスト】(4月学力~9月学力)

総合GTZ	各GTZ人数														計
	S1	S2	S3	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	C3	D1		
4月	A3	8	11	15	12	25	29	43	24	16	4	3	1	4	195
9月	A3	13	11	14	15	30	40	26	20	10	8	1	3	1	192

学力テスト 偏差値推移



学力テスト 文法項目得点率



【授業アンケートより】

1. 文法の定着は向上

αクラスでは文法問題の得点率が上昇し、定着率が若干向上。反転授業で演習時間が増えたことが要因と考えられる。

2. 学習方略の活用は低下

「深い処理を伴う学習方略」の使用率が下降し、特に「体制化方略」の低下が顕著だった。一方で、メタ認知(プランニング)は向上していた。

3. 今後の課題

文法の定着には成果があったが、学習方略の強化が必要。特に「体制化方略」を促し、理解と応用力を高める指導が求められる。

考察と今後の課題

1. 反転授業の影響は限定的

定期考査やαクラスの定着率に大きな変化は見られず、授業形態の変更だけでは学習定着に直結しない可能性が示唆された。

2. 文法の得点率は向上

解説時間を大幅に削減したにもかかわらず、学力テストの文法項目の得点率は上昇。生徒が自ら学ぶ姿勢をある程度示したことが影響したと考えられる。

3. 学習姿勢の変化は見られず

アンケート結果では、学習への動機づけや深い処理を伴う学習方略の使用に変化は見られず、学習の質的な向上には至っていない。

4. 今後の課題: 下位クラスでの展開と動機づけ

今回の実践は最上位クラスのみで、**もともと学力の高い生徒が対象**だった。**今後は下位クラスにも導入し、自ら学ぶ姿勢を育てられるかが重要な課題**となる。

そのためには、**動機づけの工夫が不可欠**であり、主体的な学びを促進する指導法を模索していく必要がある。

授業で学んだことから深めていく学び

～「なるほど」から「なぜ」を生み出し、協働で深める取り組み～

田園調布学園中部・高等部 伊藤 昌晴

実践背景

試験で点を取るための答えや知識を得ることが目的に

学習が受け身になりがち
定期考査が終われば学習が終わる

このような課題を解決するために...

学習の終わった内容を活用した実践的な取り組みを行う

新たな疑問や課題を持つようになる？
興味・関心が深まる？ (2023年度実施)

昨年度実施したものをさらに改善して実施

実践方法

- 対象学年：高等部2年
- クラス数および対象生徒人数：理系生物選択1クラス19名
- クラスの特性：女子、農学・医療系の志望者が多い
- 実践期間：2024年7月～10月

① 2024年4月～7月：事前指導

生物の授業で1学期に学習した「生物の進化」「生命現象と物質」の単元内容に関連する最新の知見・報告について夏休みを利用してまとめ、2学期にポスター発表を行うことを指示した。

② 2024年7月～8月：実施

各自が、書籍やネットを活用して、最新の研究による知見をGoogle スライドを使ってポスターにまとめた。

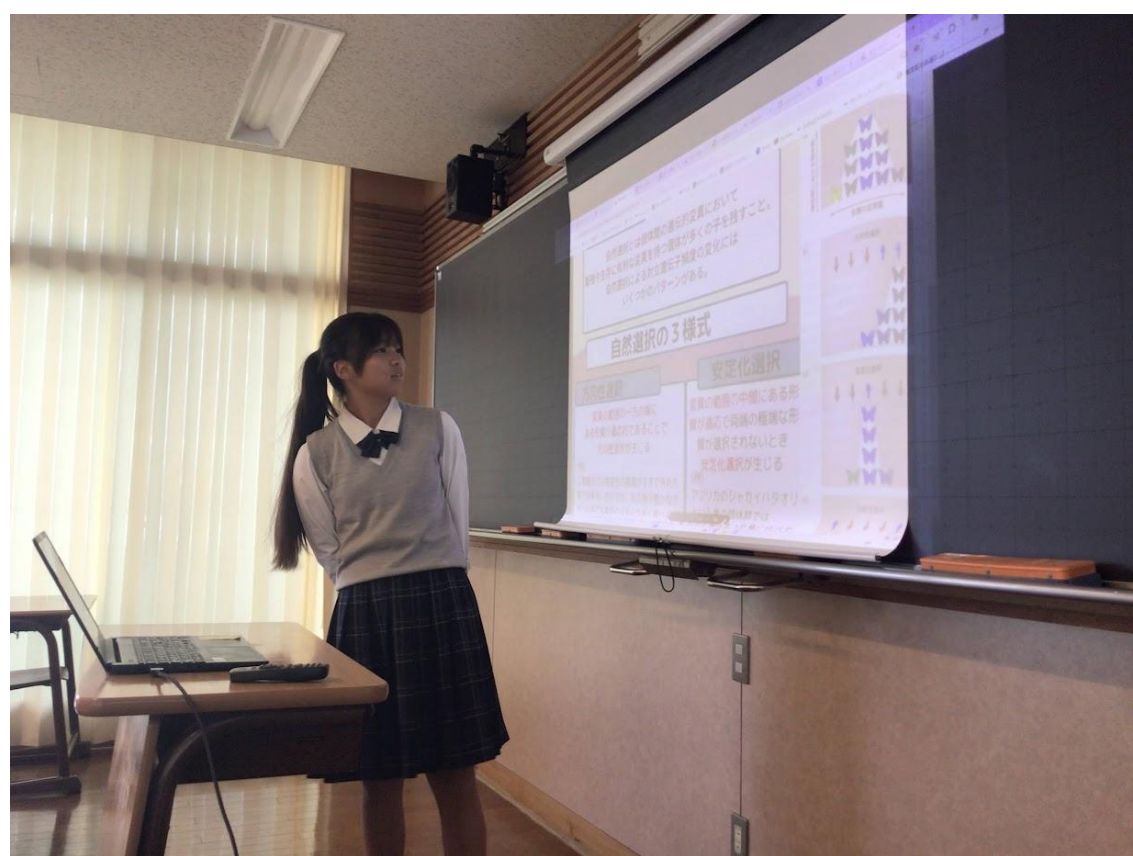
③ 2024年9月：発表

ポスター形式でまとめたスライドをスクリーンに映してプレゼンテーションを行った。

④ 2024年10月：評価

発表を聴いた各生徒が感想・コメントを全員に送り、他の生徒に送ったものもすべて共有し、それをもとに記述式の振り返りをさせた。

事前と事後に、アンケートを実施し、比較検証した。



縄文人はグルメでおしゃれだった？マクロ機能・貝殻でこだわりのアクセサリー

高2理科40番 松本朝夏

この記事を讀んだ理由
1学期の授業で、人間の進化について学んだ。授業では、世界のように人間が拡大したのを主に学び、私は、日本での祖先の暮らしについての興味を持った。特別展「海の人類史～バイオニアたちの100万年～」についての新聞記事を紹介する。

新聞記事について
縄文人がグルメでオシャレだった？という記事が面白かった。3000年前に人類が何を食べていたのか、また、縄文時代の生活から紐解く縄文時代の暮らしが、現代の暮らしと比べてどう違うのか、興味を持って読んでみた。特に、縄文時代の食生活や、貝殻を使ったアクセサリーの作りかたが、現代の暮らしと比べてどう違うのか、興味を持って読んでみた。また、縄文時代の生活や、貝殻を使ったアクセサリーの作りかたが、現代の暮らしと比べてどう違うのか、興味を持って読んでみた。

記事を讀んで考えたこと
縄文時代の人は狩猟生活をしているイメージがありました。しかし実際は、海と深く結びついて、また大塚のツボも多く掘削し、生活を営んでいたことから、縄文時代は海と深く結びついていたように感じました。海を渡って生活を営んでいた縄文時代は、現代の暮らしと比べてどう違うのか、興味を持って読んでみた。また、縄文時代の生活や、貝殻を使ったアクセサリーの作りかたが、現代の暮らしと比べてどう違うのか、興味を持って読んでみた。

取得データおよび検証方法

① 事前、事後に「主体的な学びを科学する研究会」アンケートを実施し、比較した。

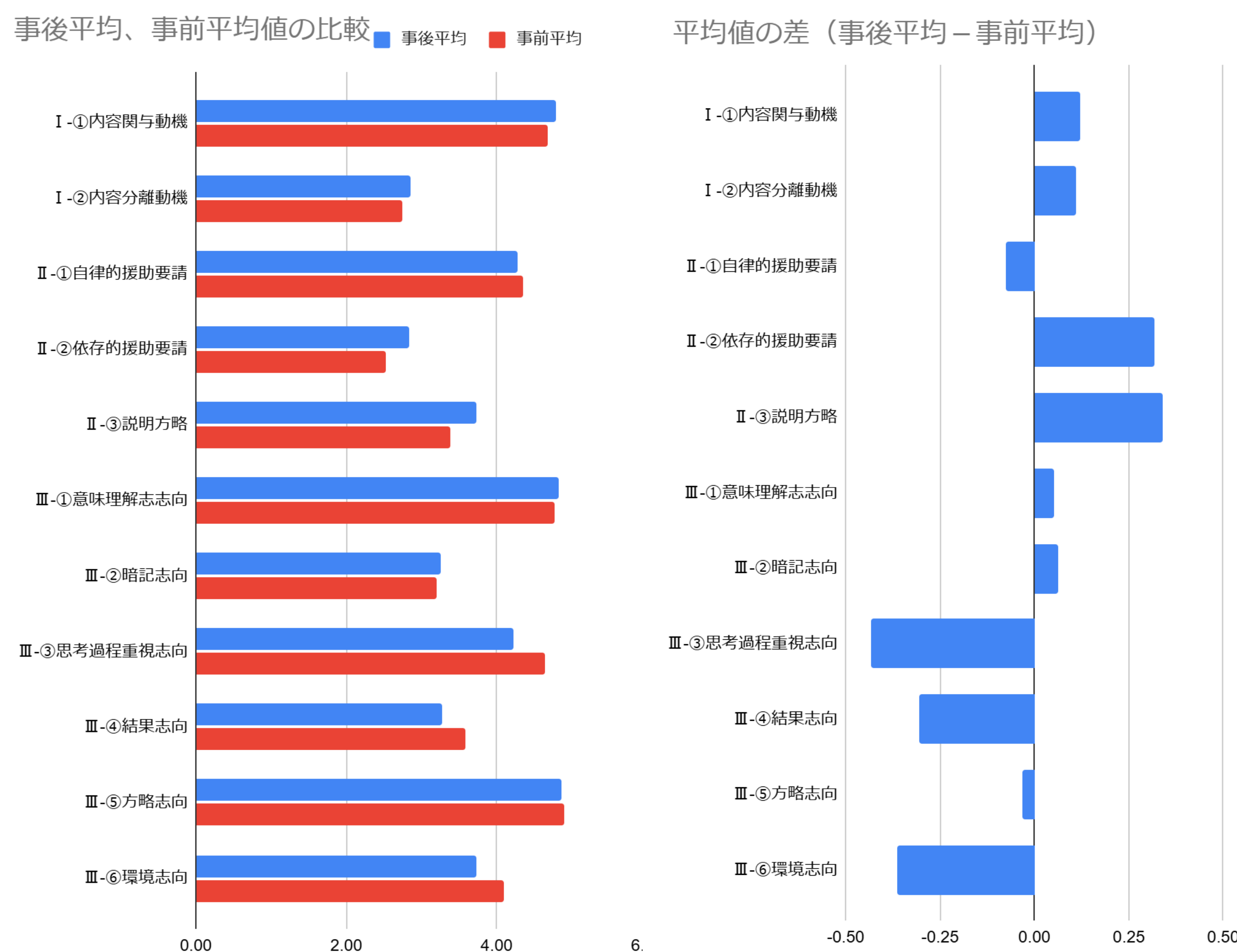
72個の質問に6点満点で回答させ、その上で21のグループに集約し、そのうち全体の平均との差異が大きいもの、前後で変化の大きいもの、今回の研究に関わりの深いものを抽出し、グラフに示した。

② Formsで集めた相互評価をもとに、自己評価をさせて、学びの深まり、学習への動機づけを検証した。

※ 前回(昨年度)と比べて工夫した点

前は4人グループでの共有だったが、今回は少人数であったため、**全員の発表を全員で聴く**形をとった。
アンケートで**生徒の変化を数値化**した。

結果



① アンケートの結果の評価

・全体の平均は事前が3.99、事後が4.02であった。項目の前のローマ数字は、Iが学習動機、IIが学習方略、IIIが学習観に分類されるものを示している。

・比較的ポイントが高かったのは内容関与動機、意味理解志向、方略志向であった。そのうち事後にポイントが上がったのは、**内容関与動機、意味理解志向**であったので、今回の取り組みの目的はある程度果たせたと思われる。

・依存的援助要請、暗記志向のポイントが低いのは望ましい傾向であったが、事後に依存的援助要請が伸びているのは、元々のポイントの低さに加えて、他の生徒の発表を聞いた影響があったと思われる。

・思考過程重視志向はもとのポイントが高かったが、事後の下げ幅が大きかった。結果志向も同様であったが、質問内容が、**問題を解くための学習観**になっていたためと考えられ、今回の取り組みが有意義であったことを示唆している。

② 自己評価(振り返り)

・自分の取り組みについての評価は、授業で学んだ後なので、**調べた内容をより深く理解することができた**という回答が多く見られた。

・他の生徒に対する感想では、**自分が興味を持っていなかった内容にも触れることができて、関心を持つことができた**と答えた生徒が多かった。(テーマが重複することはほぼなかった。)

考察と今後の課題

・考察

昨年度に引き続き、授業後に関連内容を調べて発表するという取り組みを行った。選択の少人数のクラスになったので、昨年よりも生徒相互の関わりを強めた取り組みを行った。

- ・小グループの発表→全員の前での発表
- ・発表者全員への感想・コメントとその共有
- ・相互評価をふまえての自己評価

昨年度は生徒の変化を数値化できず、自由記述の振り返りを分析することどまったが、今回は、アンケートをとり、**数値化して分析**することができ、生徒の変化がより明瞭になった。

選択のクラスなので、昨年度必修のクラスで実施したときよりも学びへの動機付けが高まったと感じた生徒の割合が多く、目標とした**授業・考査で終わらない学びの姿勢が身につき始めている**と感じられた。

今回は生徒相互の関わりを強めたので、**自分の興味関心だけでは到達できない気づき**があった。

・今後の課題

この取り組みを繰り返すことでさらに学びへの意欲の向上にプラスの影響を与えているかどうかを検証していきたい。